広報にしはら

発行所
西原町役場
〒903-01
西原町字嘉手苅112番地
電話（09894）-5-4533
印刷
栄光堂印刷

西原東、準優勝の大快挙
全日本バレー小学生大会

第三回全日本バレーボール小学生大会・ライオンズカップは、八月十五日から十八日まで東京の駒沢体育館で行われ、西原東クラブ男子チームは準決勝戦まで破竹の勢いで勝ち進んだが、決勝戦で武庫の里（兵庫）に0－2で敗れ、惜しくも全国制覇はあと一歩であった。

全国から十人の優秀選手が選ばれたが、アタック賞＝大城仁君、セッター賞＝高里一成君、サーブ賞＝小川均君の三名が西原東クラブから出た。また、優秀監督賞に宮里憲孝監督が選ばれ、この大会での成果は非常に大きかった。このチームのメンバーから将来、国体選手、オリンピック選手が生れることを期待したいものである。

尚、対戦結果は次の通り。

▼予選
西原東2（15－3、15－5）0石川（石川）

▼決勝トーナメント1回戦
西原東2（15－2、15－10）0鹿沼（南北海道）

▼2回戦
西原東2（15－3、15－7）0とみやち（青森）

▼3回戦
西原東2（15－7、15－8）0吹三（大阪）

▼準々決勝
西原東2（15－5、15－8）0東希望が丘（神奈川）

▼準決勝
西原東2（15－9、15－13）0ますらお（茨城）

▼決勝
武庫の里（兵庫）2（15－6、15－7）0西原東

▲西原東クラブチーム、8月20日、全国大会から帰ってきて祝勝会を前にして校庭で記念撮影。

ひとり暮らし老人宅に町社協が非常ベルを設置

町内のひとり暮らし老人（百十一名）の日常の事故や体の異常をいち早く隣近所に知らせようと町社会福祉協議会（宮平吉太郎会長）では、昭和五十八年度在宅福祉事業の一環として八月二十五日、二十六日に十三名の該当者宅に非常ベルの設置を行った。

この非常ベルは、緊急時等の際にスイッチを押して近隣住民に救援を頼むもので、隣近所の方々の了解を得て取り付けられた。ベルの音量は、約百メートル四方まで聞えるというものである。スイッチは、老人が最も使いやすい部屋内部の柱などに固定され、ベルは外側の壁に取り付けられた。この設置費用は約十五万円であったが、共同募金の一部からも充てられた。

町社協では、次年度も該当者に対し非常ベルを設置し、在宅老人の福祉を一層充実させていく計画である。今度ベルを取り付けられた老人は「これでやっと安心して生活できます。」と設置を喜んだ。

▲非常ベルの設置を喜ぶ関係者の方々。

町の世帯・人口
（昭和58年7月末現在）

世帯数	4,831世帯
人口	18,637人
男	9,396人
女	9,241人

7月の人口移動

出生	35人	死亡	6件
転入	138人	転出	77人
婚姻	13件	離婚	2件

町民体育館建設委員決まる

町民体育館建設委員会設置要綱に基づいてその建設委員十名の辞令交付式が八月九日午前九時半、町議会委員会室で行われた。宮平町長から辞令が手渡された後、席上、同建設委員会の委員長と副委員長が互選され、委員長に城間勇吉氏（県建設技術センター理事長）、副委員長に平安恒政氏（助役）が選ばれた。

この委員会は、町民体育館建設等を検討するために設置された町長の諮問機関であり、各界から委員が選ばれた。

尚、建設委員は次の通り

〔議会議員〕親泊輝武（議長）、翁長正吉（総務委員長）

〔学識経験者〕城間勇吉（県建設技術センター理事長）、比嘉徳政（沖縄国際大教授）、喜屋武正吉（県バスケットボール協会理事長）、新里米吉（西原高校教諭）、石原佑哲（コザ小校長）

〔行政〕平安恒政（助役）、小川正元（教育長）

▶町民体育館建設委員会が設置

新生活運動協議会終わる

日常生活から見栄や無駄を省き心と心のつき合いをし、明るく豊かな家庭生活を築こうと一町新生活運動実践推進協議会（宮平吉太郎会長）では、八月一日午後三時から町役場会議室で関係者二十八名が出席して協議会を行った。熱心で活発な討議の結果、冠婚、葬祭、盆と正月などについてそれぞれ一定のルールを次の通り決めた。

冠婚について
。お祝儀は二千円以内にしよう。ただし、主催者は案内状には、「新生活運動の趣旨により、祝儀は二千円以内でお願いします。」と明記した上記念品は廃止しましょう。

葬祭について
。香典料は五百円以内にしましょう。
。香典返しは廃止しましょう。

盆と正月について
。お中元とお歳暮は、千円以内にしましょう。

この趣旨に賛同し多くの町民がこれを守っていくよう心からご協力お願い致します。

町青少協 防犯功労で表彰

七月二十六日午後、那覇市内の県交通安全協会連合会会議室で行われた県防犯協会連合会の昭和五十八年度定期総会の席上でこれまでの事業実績が認められ、同会から防犯功労で町青少年健全育成協議会（宮平吉太郎会長）が表彰された。表彰式では、石田県警察本部長から平安恒政副会長に表彰状が手渡された。

移動金融相談のお知らせ

町商工会では、沖縄振興開発金融公庫の協力を得て左記の通り移動金融窓口相談を行います。

金利の安い国のいろいろな制度資金全般についての相談であり、該当事業所に対してはその場で借入申込書を交付、受付致します。

相談は、無料ですのでお気軽にご利用下さい。

記

日時　九月二十七日（火）
午後一時半～六時半

場所　中央公民館

※法人事業所は最も新しい決算書を持参して下さい。

※設備資金借入の場合は見積書が必要です。

尚、詳しいことは町商工会（電話五一六一三六）にお問い合せ下さい。

第5回町陸上競技大会は
9月24日午後2時西原東小学校グラウンド
9月25日午前9時西原中学校グラウンド

おらがまち　十三区＝我謝（十四）

はじめに

十三区は、我謝を主体に兼久の一部からなり、四七二世帯、一、八三二人（今年七月末現在）を有し、本町で二番目に人口の多い行政区である。我謝の集落は、上の森（イイヌモー）附近からできはじめ、末広がりに南下し旧藩時代までに我謝一四〇番地の小橋川正世氏宅前から銀バス西原線の終点を結ぶ通りまでができあがった。

約百二十年前から長溝川をはさむようにして平野部の畑だったところが次々と分家した二男三男の家となっていった。現在の六班、五班、三班、二班である。戦後さらに南下し海岸附近まで住宅が立ち並ぶようになり現在の我謝を形成している。また、昨年から今年にかけて我謝八番地の西原ハイツ内七十一世帯が入居している。

▲上の森（西原ハイツ）から眺める13区我謝の全景。我謝は上の森からしだいに平野部へ発達していった。

位置

十三区は、本町の南端に位置する地域で東西に約一・六キロメートル、南北に八〇〇メートルの区域で南側が与那原町に接しており、東側が十二区および海岸部、北側が十一区および十四区、西側が十四区にそれぞれ接している。

西の運玉森、北の我謝森、安室高森（宅地造成で現在はない）一帯が高地で南東に平野が開け、その平野は民家とキビ畑でうまっている。南東の方に海があり、その周辺に工場や事業所、民家が立ち並んでいる。国道三二九号線から北西側が部落の中心部で、我謝入口からゴルフ場入口＝旧安室高森にかけての町道我謝ー小波津線をはさむようにして東西に住宅が立ち並び帯状に集落が形成されている。概して我謝森の麓及び新島小の高地部よりも平野部の方が民家は密集している。

我謝の由来

我謝の地勢からみて、古くは我謝部落の近くまで海浜であったと思われる。伝承によると大昔は字事務所付近まで波が打ち寄せていたという。我謝の謝は海岸地と関連がある『南島風土記』に、「謝敷、謝名、安謝、与謝、謝花等のジャが、また海岸に多い地名で、シャコ貝をアザ貝と唱えるのと関連する。」とある。

古くは字兼久は我謝ヌ下と呼び我謝馬場は我謝ガニクと呼ばれていた。

ここ我謝部落では珍らしく姓に関係なく名前に「我」がつく人が多い。城間我典（台南製糖勤務）、宮平我触（平良村掟、西原村産業信用組合長）、小橋川我光（教員・村会議員）、平良我美、小橋川我甘（番所文子・役場吏員）、宮平我味、宮平我直（陸軍曹長、村会議員、教員）、宮平我裕等である。

かつて、我謝には三つのマキョ（同族集団）があった。エボシガワノ嶽、上ヌ嶽、謝名越ヌ嶽の三御嶽を中心にして三マキョは形成されていた。十二世紀ごろにマキョ時代が終わるころになると、上ヌ嶽を中心にして我謝部落の原型集落が形成されるようになる。

我謝部落の発祥の地は三本松とも呼ばれる上ヌ嶽だという。最初ここに居をかまえたのは上神謝の創始家だといわれ、上神謝の屋敷は上ヌ殿を含んでいた。神謝門中（バラ）は我謝の国元（創始家）として崇められている。

上神謝の宗家（ムートゥヤー）はその後何回か移動している。①三本松（上ヌ殿）、②中ヌ殿、③下ヌ殿、④兼久ガー、⑤獅子屋、⑥井ヌ上神謝、⑦現在の上神謝（我謝一四五番地）としだいに低い方に移ってきている。その原因はいろいろ考えられるが、風水（フンシ）と部落の移動が主な原因だと思われる。

町では部落発祥の地である我謝モー一帯の宅地造成に伴い、昭和五七年七月から九月にかけて我謝遺跡の発掘調査を行った。

その結果、グスク系土器や青磁器、石器等多数が出土した。そのことから我謝遺跡はグスク時代に位置づけられるとしている。今回の宅地造成以前にもこの付近は一九七一年にエッソ外人住宅が建設されている。この時にも大量の遺物が出土していたという。残念なことにこの遺物は一片も残っていない。

マキョ時代からグスク時代にかけて、人々はすでにジャーガル土壌の西原平野の開発に乗り出した。稲や麦を栽培する農耕生活を営むようになった。ジャーガル地帯の開発は鉄器の移入によって飛躍的に進んだ。

沖縄で最も古い歌謡集で十六・七世紀に編集された『おもろさうし』に「がじゃ」の地名がでてくる。「我謝の浦」、「我謝の浦神」「我謝杜」等の歌詞が出ている。このことから、我謝は古い集落でかつて交易港（我謝の浦）として栄えていたことがうかがえる。

我謝遺跡から十三～四世紀の中国陶磁器が出土している。このことは我謝の地方豪族が我謝港を利用して直接中国（明）と交易していたことを物語るものだろうか。

拝所と旧跡

我謝は歴史が古いので他部落に比較して拝所が多い。一七一三年に首里王府によって編纂された「琉球国由来記」や地元の古老たちから聞き取りした分について記してみる。

上ヌ嶽　上の森の頂上付近にあり、三本松とも呼ばれていた。その御嶽の下方に上の殿があった。戦前まで二本の大きな松が残っていた。ここは部落の発祥の地として人々から崇められている。古くはここに国元の神謝腹の宗家があった。神名はマヤリ君ガナシノ御イベという。西原ハイツの宅地造成により上の森は原形を失い、住宅団地に変容し、今はその名を残すのみとなった。

エボシガワノ嶽　運玉森の北麓、我謝部落の北西側にあり、拝井泉の一つである。かつては聞得大君ガナシが毎年参詣に来た。羽衣伝説がある。

我謝根所火神、我謝巫火神、我謝里主所火神　それら三つの火神は上ヌ嶽の一角にあったが、現在は、我謝の殿（元の獅子屋）で三つの火神を合祀している。根所火神では、稲穂祭の時に、我謝、与那城、安室、桃原の住民から米や酒を出させて我謝ノロによって祭祀がとり行われたという。

中ヌ殿　一七一三年以降に新設された拝所であろう。

下ヌ殿　中ヌ殿より新しいものと思われる。上ヌ殿とともに上の森内にあり、それら三つの拝所は上の嶽に接近しておりその点を結ぶと三角形になっていたという。地番はいずれも十三番地内にあった。

獅子屋　我謝三〇番地に小さな瓦葺の小屋を建て保管していた。現在は、我謝の殿になっている。

フジュンガー　我謝入口バス停付近にある。

マカーガー　部落の北端にある古い共同井戸で、我謝のマカーという人が海から石を運んでその井戸の石積みをしたことから「マカーガー」と呼ばれるようになった。字の拝井泉である。

クムイ　字事務所の近くにあるクムイ（池）。首里の龍潭池に対する火返し（ヒーゲーシ）池とし字民総出で掘ったという。消火用の防水池として利用されていた。

戦前の年中行事

戦前、我謝部落は純粋な農村集落であった。明治末期の「田倒し」以後は甘蔗栽培を主とするようになった。しかし、旧来からの稲作中心の年中行事は毎年絶え間なく続けられた。「田倒し」で稲の栽培を止めた後も、他村からワラを購入し網引を行っている。次に掲げる戦前の年中行事のうち、現在でも取り行われているのもある。

正月（旧暦一月一日）　クスッキー（二月二日）、サングァチサンニチー（三月三日）、清明祭＝シーミー（三月中旬）、畦払い＝アブシバレー（四月）、ユッカヌヒー（五月四日）、五月ウマチー（五月十五日）、原山勝負（五月中旬）、六月ウマチー（六月十五日、ウマチー綱）、ウファチ綱（六月二十五日）、盆（七月十三日～十五日）、ハチグァチアシビ（八月十三日～十七日）、冬至＝トゥンジー（十一月）、鬼餅＝ムーチー（十二月八日）などである。

我謝ではウユミ（折目）は他の部落より一日早く行われた。

昔、御茶多理真五郎（ウチャタイマグラー）の亡霊が供物（ウサギムン）を腐らせたので首里に行く時、御茶多理道（ウチャタイミチ）を通る部落つまり桃原、安室、小波津、我謝、小那覇、嘉手苅ではウユミを一日早めにしたという伝説がある。また、一説によると、昔、西原、中城の両間切は首里の御殿・殿内への奉公人が多く、奉公先の節句とかち合わないように一日早めたとも言われている。

我謝綱の由来

昔、我謝の上神謝家に二人の兄弟がいた。当時、我謝一帯の田畑はすべて上神謝家の所有だったという。その兄弟は我謝部落を二つ

（次面につづく）

13区の概観図

10月1日に住宅統計調査が行われます。ご協力お願いします。

の組に分け、兄はリンゴー組、弟はウフカー組とし、農作業を競いあった。兄弟はそれぞれ自分の組が優っているとして、互いにゆずらなかった。兄が、「それでは藁で大きな綱を作り、綱引でもって勝敗をきめよう。上作の稲の藁ならその綱も強いはずだ。」と言った。綱引を行うことによって稲作の生産も高まり、藁も有益に使われ、一石二鳥でした。

綱引きは、四百年の伝統を誇るとも云われるが、年代については定かでない。戦前まで綱引に使う旗頭は、首里王府からもらった「御拝領旗」であった。

一般的に綱引の組分は地理的に分けられるが、我謝では門中組織によって組分していた。リンゴー組は雄綱で、上神謝バラ・新神謝バラ、次男神謝等の親類筋が参加した。雌綱のウフカー組には前神謝、前仲謝等の親類筋が参加した。リンゴー神謝対ウフカー神謝の綱引が、その後我謝部落全体を二分する綱引に発展した。リンゴー神謝の土地を耕作している家はリンゴー組を加勢し、ウフカー神謝の土地を耕作している家はウフカー組を加勢するようになった。

リンゴーとウフカーという語が何を意味するか不明である。沖縄で唯一の呼び方でありその解明が待たれている。

▶綱をつぐ寸前のところ

十七～八年前までは必ず旧暦の六月二十四日に綱を作り、二十五日に綱引を催した。しかし、現在では旧暦の六月二十五日前後の最も近い日曜日に綱を作り、綱引を行っている。

各戸より徴収した寄付金で金武町伊芸から藁を購入し、リンゴー組（雄綱）はマカーガー付近で、ウフカー組（雌綱）は大田良付近の広場でそれぞれ綱を作る。

村芝居

八月十五夜には前大田良の前広場（綱引場）で村芝居が催された。これは単なる娯楽ではなく、五穀豊饒と村の繁栄を祈願する神行事である。村芝居は俗に「八月遊び」といわれ、部落の守護神を慰めるための歌謡舞踊を意味する。部落の七歳から五十歳までの男全員が参加する大きな字行事である。

旧藩時代には優秀な人たちを選抜して芸を教えた。一ヶ月前から練習を始めた。八月十五日夜に広場に築いた舞台で上演し、一般に観覧させた。費用は各戸から徴収し、これに要する諸物品の購入費にあてた。

村芝居はおよそ三部門に分類できる。「組踊」、「雑踊」、「獅子舞」であるが、その他に「狂言」「棒術」等があって、それらをいろいろ組み合せて村芝居のプログラムができる。人気のあった「組踊」は最後に上演された。

最初は獅子舞が演じられ、御前風、前ヌ浜等の雑踊りが続き、組踊の「久志の若按司」で終了した。その頃になると月も運玉森に隠れた。

戦前、宮平加真氏（前屋良）が小波津部落の人たちに組踊を教えた。我謝の組踊りの特長は組踊の後半にマルムン（天願按司の家来）が出てきて、観衆に今までのあらすじと次にどうなるだろうと口上することである。このマルムンの口上は大正期ごろ宮平我直氏が宜野湾の野嵩から習ってきた。戦後昭和二十二・三年ごろにも一回組踊が上演された。また村芝居で運玉義留をやった時、兼久の露天の劇場でも本物の役者らが運玉義留を上演していたが観客席はガラガラだったという。

偉大な政治家平良幸市

平良幸市氏

元県知事であった平良幸市氏は、明治四十二年七月二十三日、字我謝六三六番地に生れた。

県立第一中学校を経て昭和三年に沖縄県師範学校本科第二部を卒業した。

昭和三年から中城尋常高等小学校訓導を皮切りに教員生活がはじまり、十七年に沖縄県拓務主事補、内政部農務課勤務を経て十九年に中城村喜舎場国民学校教頭になり終戦を迎えた。

戦後は、三十一年に文教局庶務課に勤務、二十二年四月第十二代西原村長に任命され二十三年二月に第十三代村長に当選（二十五年九月まで）したのを振出しに政界に入って行った。村長時代に沖縄民政議員を兼務している。

二十五年十一月に沖縄郡島議会議員に当選後、立法院議員（八回）と県議会議員（一回）に連続当選し不敗の記録を打ち立てた。その間、議長に二回就任し、社会大衆党の書記長、委員長を歴任した。

昭和五十一年六月に県知事に就任し、自治権拡大と反戦平和を柱に終始一貫して沖縄の戦後処理、復帰処理等に貢献され、その行政手腕に大きい期待が寄せられていた。五十三年七月に七・三〇交通方法変更と予算折衝のため上京中、脳血栓で倒れ、同年十一月に任期半ばで辞職した。五十七年三月五日にご永眠された。

神謝前後と伊佐蒲

昔、我謝に神謝前後（カンジャメークシー）と伊佐蒲（イサカマー）という有名な武勇の達人と強力者がいた。

神謝腹宗家の神謝前後（カンジャ）の武勇を耳にして、他村から次々と名ある武勇の達人たちが試合のたちあいに来たが、神謝前後が巨漢で怪力だったため、その力を披露するとたちあうまでもなく挑戦者は恐れをなして退散したという。その後だれも彼に勝った者はなかった。

この人の使った刀は、島津の琉球入りの時取り上げられたが、その刀を入れる赤木製の箱（六尺余）だけは戦前まで上神謝家に残されていた。神謝前後は、武勇と仁徳を兼ね備えた我謝の武士であった。

伊佐腹宗家の伊佐蒲の強力も有名で家のヒンプンにするためたて六尺、横九尺、厚さ一尺、重さ三二〇〇斤（一、九二〇キログラム）の海石＝サンゴ石灰岩（ウミイサー）を我謝一二〇番地にある自分の屋敷まで運んだとも言われる。しかし、我謝九五番地の新垣良吉さん（三男伊佐）は、「一人であんなでっかい石を運ぶのは無理であり、大勢の協力で運んだであろう。たしかに強力者でもあったが、それよりも人を動かす仁徳に優れた実力者であっただろうと思うね。」と反論している。

いずれにしても、クレーン等の土木機械もない時代に我謝海から村内（ムラウチ）まで大きい海石を運ぶのは、至難の業であったことがうかがわれ、その偉業とその名を後世に伝えられる程、知恵のある秀れた人物であったであろう。

移民

我謝は町内でも多くの移民者を送り出した字である。とくにハワイ移民が多く、現在、一世、二世、三世等を含めると約六〇世帯を越すといわれている。

移民の原因はいろいろ考えられるが、我謝の場合は明治四一年に我謝ヌ下（現在の兼久）への糖業改良事務局の設置に伴い、耕地を売却し耕作地を失ったためその代金でハワイへ渡った人が多かった。また、そのころから移民ブームが起きていた。この二つの原因が大きかったであろう。

移民者たちが成功し、村の兄弟を「呼び寄せ」したり、村の娘たちと「写真結婚」をした。移民先に永住するのもいたが、ほとんどの人は錦を着て故郷に帰えるのを夢見ていた。単身でハワイに渡り、四～五年後帰郷し三千円の瓦葺きの家を建てた。ハワイイチーの瓦葺の家を見て、村の青年らはわれもわれもとハワイへ渡った。

ハワイ移民として入国するには五千貫＝百円の「見せ金」が必要だったので、その金のない人たちはハワイへ上陸することなく、メキシコで炭坑労働者として働いた。

移民者から家族への送金は年二回つまり旧正月・旧盆に集中していた。送金は十ドルから百ドルであった。終戦後、我謝事務所を建設した時、同字出身の海外移住者より多額な寄付金が送られてきた。

ペルー移民の場合、町人会の中で最も我謝出身者が多く、昭和三四年九月頃に二十八世帯であることが確認されている。町人会の約二二％を占めている。明治、大正にかけて契約移民として単身ペルーへ渡り夢中ばして病いに倒れた者、成功して帰郷した者、昭和三十四年後ペルーへ渡った者などを合せると明治から現在までに約六十世帯が、何らかの形でペルー移民に関係しているであろう。

また、ブラジルへ二十世帯、アルゼンチンへ数世帯が移民で行っておりまさしく数ケ国にまたがり活躍されている。

我謝の方言の特徴

我謝の方言は、アクセント（発音の調子）とイントネーション（発声の抑揚）にその特徴があり、おもしろみがある。語調は、概してスローテンポであり、荒っぽい。

「ニシバラ、ガージャ、アンダギー、ジョーウガ」（西原我謝の人は天ぷらが好きである）と他シマの人が我謝方言の特徴を端的に表現しているものがある。

語いも我謝でしか使われないものが数多く残っている。「ヤマサンタミ」（傷つけなかったか）の疑問詞「タミ」、アキサミヨーに匹敵する感嘆詞「ワァーオー」、語調や状況によっていく通りにも意味がある感嘆詞「ファイ」、「ウファ」荒っぽさを感じさせる接続語「ヒャー」などがそれである。聞き手が話し手に対し合いづちをうつ場合も「ファイ」、「ウファ」は使われるので普通の会話でも頻繁にでてくる。

戦前、那覇へよく行商に出かけたものだが、そこで、出会った部落の人たちが大声で話しているのを聞くと「あれは西原ガージャンチュだ」とすぐわかったほど個性的なものだった。

門中

我謝の門中は、神謝腹カンジャバラ（平良姓）、我勢頭腹ガーシードゥバラ（玉那覇姓、小橋川姓の一部）、読谷山腹ユンタンジャバラ（小橋川姓、小川姓、城間姓、宮平姓、新垣姓）、宮平腹ナーデーラバラ（宮平姓）、伊佐腹イサバラ（新垣姓）呉屋ゲヤ（呉屋姓、新垣姓）新里シンジャト（城間姓）に代表されるが、その中でも神謝腹が最も古く我謝の創始家（ニーヤー）と云われ、また我勢頭腹の宗家から我謝ノロが出た。現在、我謝では、神謝腹と読谷山腹の子孫が最も多く、次に宮平腹の数が多い。

昔は、門中のきずなは強く、宗屋を建てる時のカヤ刈り、農耕、きび刈りなどを協力して行ったが、この共同作業（ヰーマール）を行う組織が門中を主体にして五組あった。それが前組、カーヌ上組、仲門組、読谷山組、宮平組である。大東亜戦争前まで続いていた。いわば相互扶助を目的とした生活共同体であった。

▼**人口**＝一、八三二人▼**世帯数**＝四七二▼**面積**＝〇・六五六九平方キロメートル▼**人口密度**＝二、七八九人▼**耕地面積**＝四六・八〇ヘクタール（我謝地番全体）▼**さとうきび生産**＝三、一五〇トン▼**事務担当者**＝呉屋賀真▼**老人クラブ会長**＝小橋川要好▼**婦人会長**＝宮平洋子▼**青年会長**＝城間秀夫▼**字書記会計**＝宮平光雄▼**壮年会長**＝宮平善市▼**わんぱくこども会育成会長**＝名嘉二班平良善弘、三班喜屋武昇、四班城間義光、五班宮平友義、六班与儀勇雄、七班新垣実、八班宮平忠茂▼**昭和五十七年度字歳入決算**＝三六二万一、〇二五円▼**同歳出決算**＝二五一万一、二六五円▼**五十八年度字歳入歳出予算**＝一八三万五、七六〇円▼**字事務所建物面積**＝八九平方メートル

13区事務担任者
呉屋賀真

秋の巡回行政相談は10月25日午前10時～午後4時、町役場会議室。

安室自治公民館盛大に落成祝う

安室六一番地（敷地＝一七〇坪）にモダンな安室自治公民館（鉄筋コンクリート造平屋、床面積＝七二・二一坪）が完成し、八月二十七日午後四時半、区民及び関係者約百名が参加してその落成式が盛大に行われた。

落成式は、かぎやで風ではじまり、与那城長助さんから経過報告が行われた後、与那城盛弘安室自治会長からの式辞、感謝状贈呈（工事関係者、篤志寄付者など八名）、平安助役による乾杯の音頭、宮平町長、親泊町議会議長、城間町農業協同組合長からの来賓祝辞、金城哲男さんの謝辞などがあった。式辞に立った自治会長は、「公民館の落成により今後、安室部落の自治活動が益々充実することが期待されており、この落成を皆様とともにお喜び申し上げますまた、公民館建設に当り、ご厚情を寄せられた関係各位に厚くお礼申し上げます。」とあいさつした。

式典終了後、落成祝賀会が催され、地元の方々の琉球舞踊を観覧しながら遅くまで賑わった。

この公民館は、安室部落の自治会、老人会、婦人会、青年会などの活動に活用しようと安室自治会（与那城盛弘自治会長）が独自に予算化し三、六五〇万円の資金を投じてできたもの。旧来の安室公民館（鉄筋コンクリート造平屋、床面積＝一五・五坪）は昭和三十年に建てられたもので、老朽化がひどく、時代の移り変りとともに様式が旧式だったため、昭和五十六年四月の一般部落常会で公民館建設に対する合意がまとまった。

その後、役員会で農業構造改善緊急対策事業（小波津集落センターと同様のもの）の導入も検討されたが、部落の都合もあって導入を断念、部落有地＝安室高森を処分することにより建設計画を進めていった。五十七年五月に役員（建設委員兼務）が、玉城村当山など四ケ所の部落公民館を視察し部落の実情や敷地などを考え公民館の建設構想をねった。五十八年二月十八日に建築工事を着工し、七月十五日に竣工完成している。建築工事には地元の与那城建設が当った。

館内にはホール、ステージ、管理室、トイレ、小会議室（和室）、台所が間取られ、放送設備も完備され非常に近代的な施設である。屋上には、部落内にお知らせをするためにマイクも取り付けられた。

尚、建設費は、部落有地処分金三、二五〇万円、部落負担金二〇〇万円、企業からの寄付金一〇〇万円、町からの補助金一〇〇万円計三、六五〇万円で充てられた。

▲安室自治公民館が完成し、8月27日関係者約100名が参加して、落成式が行われた。

行政管理庁長官より新垣良康氏表彰

七月二十五日午後、町長室で行政相談委員として四期八年間勤めた功績により字兼久一番地の新垣良康氏に行政管理庁長官からの表彰状が手渡された。表彰式では、町長、町職員などが見守るなか沖縄行政監察事務所長から表彰状を読み上げて行われた。

新垣良康氏

あなたも作ってみませんか

クジ餅とサーターアンダギー

八月二十日午後、中央公民館で行われた親子料理講習会（講師＝町老人クラブ）で郷土菓子のクジ餅とサーターアンダギーが作られました。今回、クジ餅とサーターアンダギーの作り方を紹介します。

あなたも作ってみませんか。

クジ餅

材料

芋クジ（芋デンプン）…二カップ
水……六カップ
砂糖……二1/2カップ
塩、生姜汁、きな粉……少々

作り方

①ボールに芋クジを入れ、予め計っておいた六カップの水を少しずつ注ぎながら芋くずを手でとき砂糖と塩少々を入れ、次に残りの水を全部入れ厚手のナベに移して火にかけます。

②最初の五分は強火にして木杓子でナベ底をかき回し五分たったら中火以下にして約三〇分したら弾力とつやが出てきます。火からおろして生姜汁少々を入れて練りまぜます。

③流し箱にきな粉を薄くしき②の餅を熱いうちに流し表面がでこぼこにならないようにし上からきな粉を振りかけ自然に冷す。

▶クジ餅

サーターアンダギー

材料

小麦粉……三二〇g（三カップ）
ベーキングパウダー……小さじ二
卵……三個
サラダ油……大さじ一1/2
揚油

作り方

①小麦粉とベーキングパウダーは混ぜてふるっておきます。

②卵と砂糖を混ぜて砂糖が溶けるまでよく混ぜて①の小麦粉を入れ、ゆっくりと混ぜ、次にサラダ油を加えて軽く混ぜ合せます。

③厚手のナベにきれいな油をたっぷり入れ一五〇～一六〇度に熱し生地を一握り軽くちぎり両手でまるめて静かに入れます。一～三分したらゆっくり生地が浮き上り自然に上下回転します。はしで平均に返しながら色よくなったら持出す。

▶サーターアンダギー

町代表選手団大健闘

第十一回中頭郡総合体育大会が去った八月二十一日、二十二日、二十八日に行われ、町体協（会長平安恒政）では、バスケットボール男女、バレーボール男女、ソフトボール男子、卓球、軟式テニス、硬式テニス、ハンドボール男子、野球、相撲、ボウリング、剣道の種目に出場し、選手団もよく健闘し好成績を納めた。

尚、三位までの入賞種目は次の通り

▼**優勝**　バスケットボール男子、ハンドボール男子

▼**準優勝**　卓球、軟式テニス、バドミントン

▼**三位**　野球、相撲、剣道、バスケットボール女子

カナダからの使節団　町役場を表敬訪問

空手を通してカナダ国ブリテッシュコロンビア州バンクーバー市と沖縄との国際親善を図っていこうと州政府の使節団・尚礼館カナダ空手協会（ローリーピアス会長、メンバー九名）が八月二十日午前町役場を表敬訪問し、一時間にわたり町長、教育長、収入役などと文化交流を深めた。

一行から町に木版の記念品、カナダを紹介した本と小冊子、二百冊が増呈された。

第二回町商工会ボウリング大会

七月三十一日　宜野湾ボウル
町商工会主催

▼**団体　優勝**我喜屋金物店、**二位**ヤマシロ工業、**三位**沖縄軽金属

▼**個人男子　優勝**宮城賢雄（建建設）、**二位**山城功（我喜屋金物店）

三位宇良宗次郎（兼久給油所）

▼**個人女子　優勝**内間たつ子（幸地工業）、**二位**新川クニ子（新川ガス器具）

第一回区対抗町ボウリング大会

八月十四日、宜野湾ボウル
町体協主催、十チーム参加

優勝　十二区　二、〇五二点
準優勝　十区　二、〇五〇点

※各チームとも男子三名、女子二名で編成され、十五ゲームの総得点で勝敗を決めた。

寄付お礼

このたびの西原東小バレーボールの全国大会派遣に際し寄付を寄せられた方々のご厚意に対し厚くお礼申し上げます。

西原東小学校長　与那嶺浩
西原東小PTA会長　呉屋厚雄

香典返し

このほど、次の方々から香典返しがありました。

◎**大浜静さん**（字兼久一〇一番地）から故夫・寛良さんの香典返しとして町社協に五万円、町老人クラブに二万円。

◎**中村一郎さん**（字翁長五〇一番地）から故母・よしさんの香典返しとして五万円。

この紙面をかりて二名の方々のご厚意に感謝申し上げます。

訂正おわび

広報にしはら第一四一号二面のカコミ記事の中の婦人会長＝「宮平春子」は「宮平政子」の誤りでしたので訂正しおわび致します。

国民年金保険料　第二期
国民健康保険税　第三期
納期は9月30日までです。